

また夢をみていた。

城が燃えている。

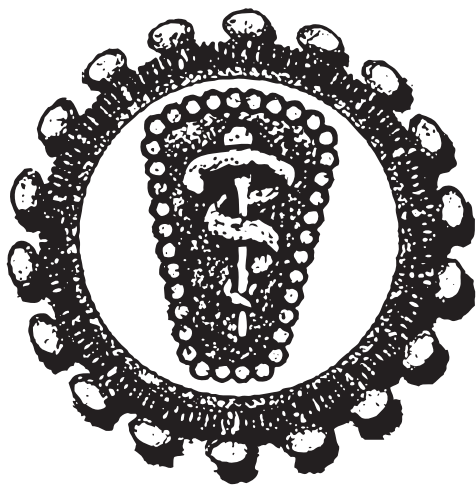
私とアーサーは、手を取って走っている。

どうしようもなく追い詰められ、死んだ人間のふりをすることになった。

十字架を手渡される。

「ミランダ様、私の十字架をお持ち下さい。連中は吸血鬼がこいつを恐れると思ひ込んでいます。ほとぼりが冷めたら必ず落ち合います。私がきつと掘り返します」

私は、埋められた。



青の匣
ハコ

ミランダ …… 土に埋められていた、不死人の少女
エドワード …… ミランダを掘り起こした青年。アーサーの孫
アーサー …… ミランダのかつての恋人
トリスタン …… ミランダの叔父。数学を研究していた
コナー …… トリスタンの弟子

青の匣にようこそ

☆本書はゲームブックです。文中に『▼移動する……256へ』のような選択肢が現れた場合、適当なものを一つ選択し、その番号の параグラフ（段落）に移動し読み進めます。

☆……説明

↓……状態の変化。

≫……強制ジャンプ。条件に当てはまる場合に指定の paraグラフにジャンプします。

▼……選択肢。条件が書いてある場合は、当てはまる時のみ選択できます。

注意…「↓」「≫」が複数書かれていた場合、表紙に近い文が優先されます。

☆付属の『冒険シート』に記録しながら進みましょう。このシートはホームページからダウンロードすることも出来ます (<http://tanishi.org/>)。主人公の現在の状態である【状況】【懸賞金】【邪悪】【仲間】【持ち物】は刻々と変化していきます。また、何かすることに【時間】も経過していきます。忘れないよう冒険シートに記録しておきましょう。

【状況】…現在の状況が記録されています。

【懸賞金】…主人公の首に懸かった懸賞金です。高額になると逮捕されます。

【邪悪】…精神が邪悪に傾いてしまった状態です。

【仲間】…冒険の途中で味方になる人物が現れます。仲間によって物語が変わることもあります。

【持ち物】…アイテムを手に入れた場合、ここに記録しておきましょう。

【時間】…「↓【時間】が30分経過した」などの指示があった場合、『冒険シート』現在時刻を記録していきます。

☆付箋のマーク♦のあるパラグラフは、頻繁に戻って来たり、参照したりしますので、あらかじめ葉を挟んでおくと便利です。

墓参り

十九世紀初頭——。

ある田舎村で吸血鬼の存在が報道された。それを発端に行われた『吸血鬼狩り』。教会の大儀の下、疑わしい者が次々と裁判にかけられ、処刑されたのだ。中でも沢山の犠牲者を出したのが『蛇塚城』——無数の穴が開いている岩山の上に建てた城のため、こう呼ばれる——の焼き討ちだ。

悪魔を追い詰めた村人たちは、城に火を放った。火が次第に大きくなり、村人の頬を明々と照らすころには、石造りの城の中で、何十人もが蒸し焼きになった。村人は歓喜し、熱狂した。五十年も経った今では、この事件は、貧しい村人の鬱憤が集団ヒステリーを引き起こした哀しい事件として、語り伝えられている。

——しかし、本当に彼らは人間であったのだろうか？

時代は流れ、十九世紀後半、寒村ウエストハム村。

うら寂しい墓地に参る人物がある。煤けた色の、長い金髪の少女。見つめている墓碑の名は『ミランダ・ゴドウィン』。彼女自身の墓だ。

彼女はミランダ。『蛇塚城』に住んでいた不老の吸血鬼——吸血鬼というのは蔑称で、彼女ら

は自分達のことを不死族と呼んでいる。だがけして不死ではない——の少女である。『蛇塚城の焼き討ち』から逃れるため、死んだ人間のふりをして五十年ものあいだ墓に埋められていたのだ。すぐに掘り返すと約束をした、彼女の使用人であり恋人のアーサーは、ついに迎えには来なかった。

芝生を越えて、背の高い、黒い外套の男がやってくる。黒髪にはゆるいウェーブがかかり、色の白いせいで、ふつうより唇が紅く見える。

「ミランダ、そろそろ行きましょう。日の高いうちに到着したさ」

アーサーの孫、エドワードだ。彼はアーサーが亡くなって何十年も経ってから遺書を発見し、眠っていたミランダを掘り返したのだった。アーサーはなぜ迎えに来なかったのか。どんな女性と結婚したのか——疑問がミランダの頭を占めていた。

遠くで鐘が鳴っている。

「さよなら」

これから二人は荒野へ向かう。道中、埃っぽい馬車の中で、ミランダは革の鞆から、大事そうに手紙を取り出し、何度も読み返していた。その手紙は、丈夫な金属製の匣に入れられて、ミランダの墓に供えられていたものだ。差出人の名前はT——自分の叔父トリストランからだと言っている。

手紙は数行の引用が記されただけの、まったく彼らしくない内容だった。しかし、今の彼女にとって、内容などどうでもよかった。叔父トリスタンは『吸血鬼狩り』に巻き込まれずに無事でいる——それだけが唯一の希望だった。

手紙の差出人である叔父トリスタンは大変な変わり者らしい。殆んどの不死族が蛇塚城に住み、毎晩舞踏会に明け暮れているのと違って、荒野に屋敷を建て、そこで数学の研究をしているのだという。

ミランダは叔父トリスタンを頼って、これから静かに暮らしたいという。エドワードも大柄な体格に似合わず面倒見の良いほうで、トリスタンの屋敷まで送り届けることになった。

ふたりは長い移動時間のなかで、やがて打ち解け、沢山の話をするようになった。

棺桶で寝ている間は冬眠のような状態だったこと。彼女は不死族としての能力が大変弱く、当然あるはずの欲求——人間に『噛み付き』をして、不死族を増やしたいという気持ち——が薄いこと。容姿も十四歳のままで止まってしまったこと。そのせいで不遇の扱いを受けてきたこと。変わり者の叔父とだけは、仲が良かったこと。

最後に彼女は、掘り起こしてくれたことへの遅い礼を述べ、そして、久しぶりに大好きな叔父に会える期待で顔を輝かせていた。

一章
トリスタンの屋敷

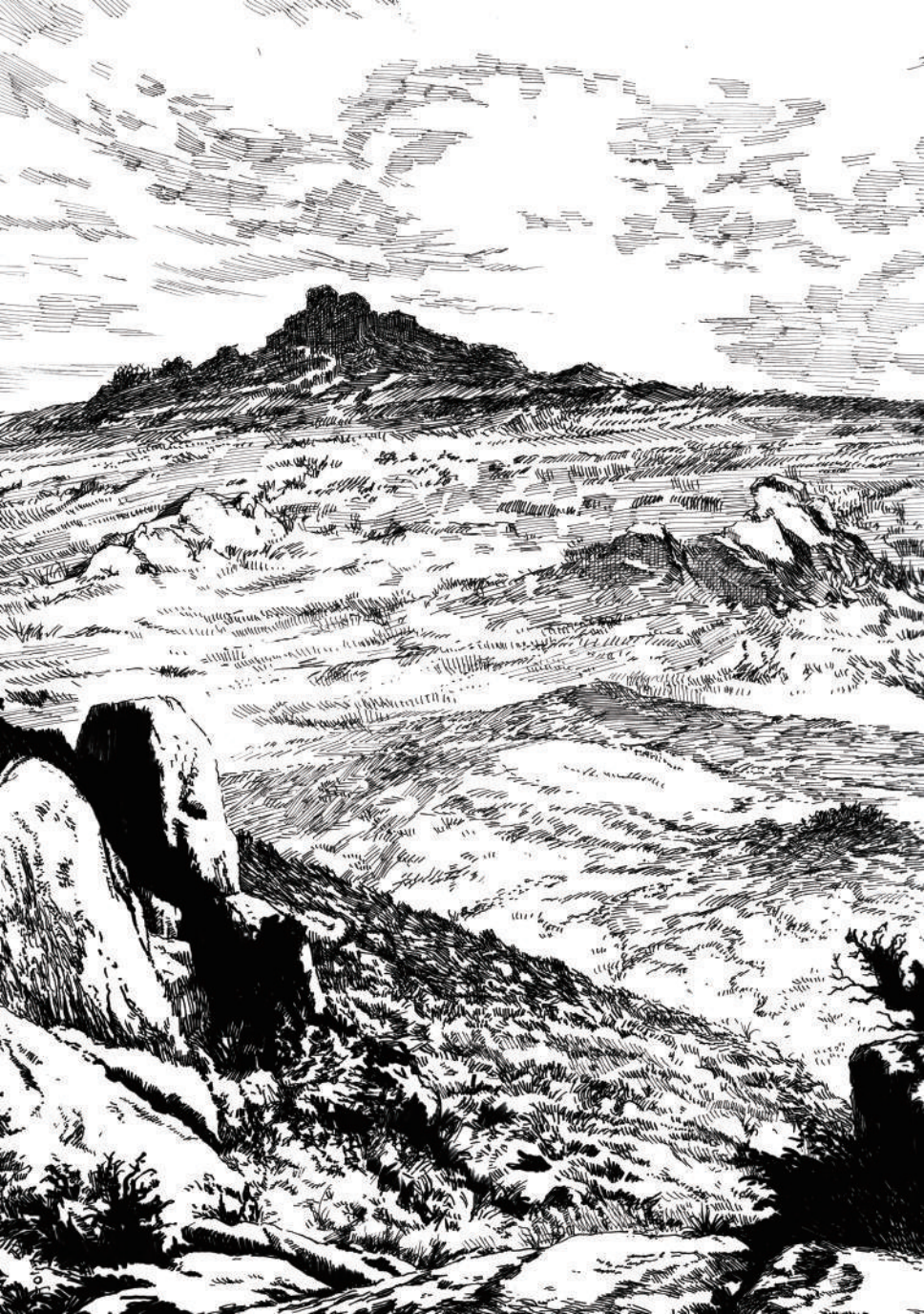
険しい山間を抜け、幾筋かの枯れ沢を渡り、とうに人跡も絶えた頃、岩と灌木ばかりの不毛の荒野が広がる。その先に、ミランダの叔父トリスタンの屋敷があるという。やがてそれらしき黒いシルエットが見え始め、詳細が分かる頃には、彼女の顔は死蝟のように白くなった。趣味のいい屋敷は『吸血鬼狩り』によって、無残に焼かれてしまっていた。瓦礫の前のミランダを励ますように、エドワードは言った。

「また希望は残っています。屋敷は焼かれたが密かに生き延びて、それから手紙を供えたのかも知れない。手紙には何と書いてあったんです？」

ミランダはエドワードに手紙を見せた。しかしそれは、奇妙な内容だった。

☆手紙に隠された『ある場所』を探索してみましよう。手紙の内容を考えることにヒントが出てきます。「トリスタンの屋敷図（パラグラフ2参照）」で場所を選び、書いてある番号のパラグラフを読み進むことで探索することが出来ます。

▼トリスタンの手紙を見る……2へ



「あちこち行くと、いたずらに時間を費やしてしまうから、まずは内容を考えてみるわ」
 「今は昼の12時ですが、あまり遅くなると、荒野は危険かもしれませんね……」

☆調べたり考えたりすることに、時間が経過していきます。文中に『↓【時間】が30分経過した』と書かれていたら、『冒険シート』の一章の【時間】を1マス分チェックします。

- ▼探している間に夕方5時を回ってしまったら……4へ
- ▼手紙の意味について考える……5へ
- ▼『An eye for an eye』について考える……30へ
- ▼トリストアンについて考える……10へ
- ▼『thou mayest live long』について考える……27へ
- ▼『Close your eyes』について考える……6へ
- ▼【状況】 1～3全てにチェックがあれば……12へ
- ▼【状況】 4にチェックがあれば……19へ
- ▼【状況】 5にチェックがあれば……42へ

I am writing to you.
Close your eyes and
you can find me.

Children, obey your parents in the
Lord: for this is right.
Honour thy father and
mother; which is the first
commandment
with promise; That it may be well
with thee, and thou mayest
live long on the earth.

An eye for an eye -I'm T

トリスタンの手紙



トリスタンの
屋敷図